**三瓶山の生い立ち**

三瓶山は中国地方で最も新しい火山である。約 10 万年前に形成が始まり、以来少なくとも 7 期の火山活動を経ている。第I期には「古三瓶溶岩」と言われる溶岩ドーム（固まった溶岩の円丘）ができた。第II期は約 5 万年前に始まり、さらなる噴火で古三瓶は陥没しカルデラが形成された。第III期と第IV期は約 4 万 5000～1 万年前で、大量の火山砕屑物が周辺地域に広範に堆積するほどの大きな噴火が繰り返し起こった。今日、日影山の山頂は第IV期に形成された溶岩ドームで、現在の三瓶山の最も古い部分である。

最初の 4 期は最も激しいもので、火山砕屑物と固まった溶岩の層の上にまた同様の層が積もっていった。第V期と第VI期は約 1 万年～4 千年前まで続き、比較的小規模の噴火をともなった。しかし第VII期は、いくつかの理由から特別なものだった。およそ 4,000 年前に始まった第VII期の噴火によって、山頂は現在の地形となった。第IV期カルデラの内側から溶岩ドームが隆起することによって男三瓶、女三瓶、子三瓶、孫三瓶の 4 つの峰が生まれた。最後の峰である太平山は、第VII期の噴火により形成された灰や火山生成物によってできた火山砕屑丘だ。第VII期の噴火により 10 メートルを超える火山灰や堆積物が積み重なり、小豆原埋没林をつくった。

最初の 7 期は地質的な記録によりはっきりと辿ることができるが、第VII期の溶岩ドームの上に積もった灰はより最近の活動を示唆しており、第VIII期があった可能性が考えられる。